

内 容

巻頭言

第66回、第67回、研究例会 報告

巻頭言

「グローバル人材の育成」について思うこと

赤塚 民三

近年のいわゆる「グローバル化」の潮流はすさまじい。かつて情報化社会という言葉が流布しはじめたかと思う間もなく、技術革新による情報機器の多様化は私などの理解をはるかに超えたものとして進展し、今も進行中である。グローバル化についても、同様の進展を見せるのだろうか？

海外旅行ブーム、外国人観光客の増加、TV の——例えば「世界の果てまでイッテ Q」からはじまって「こんなところに日本人が！」「You は何しに日本へ」「日本人妻」等々——観光の枠を超えた異文化紹介の多様な番組の隆盛、ユニクロ等企業の英語活用力の重視、「国際」結婚等々様々なレベルで、グローバル化という言葉に集約できる具体的な変化が進行している。イヤ、何も最近の変化というわけではなく、資本・金融の論理はとっくにボーダーを超えた流通がなされており、バブル崩壊後くらいから顕著に日本の企業も安い労働力を求めて進出する一方で、外国からの労働力の受入（研修生などの名目はともかくとして）は続いている。しかしながら、情報化の勢いは技術開発に領導されてきたことに比べ、グローバル化のほうは、資本・物流もさることながら人の往来も大きな鍵を占めていることから、外国への留学生の減少や現地摩擦への対応、企業での外国赴任の人気低迷などを聞くと、同じようにはいくとは限らないと思ってしまう。

だから、ここは一つ、国家レベルでのグローバル化の推進を図らねばならないというところに来たのだろう、「グローバル人材の育成」が大きな教育課題としてあげられるようになってきたのだと思う。個人的には、「国際化」でもいいのにグローバルという用語を使い、しかも「人材」という言い方をするのは、あまり好きではない。教育の使命は「個々の人格形成」と考えている人間からすれば「人材」という言葉は社会や資本の側からの要請の言葉であるし、グローバルという言葉で今までとは違う新たなエリート層を意味しているように思える。実際、大阪の文理学科を持つ10校は進学指導特色校、またはグローバル・リーダー・ハイスクールと呼ぶのは勝手だが、「国際」に関わる専門学科を持つ学校が入っていないのはどうして？と思ってしまう。

それはさておき、使える英語教育の充実に関する施策は様々な形で進行しているし、文科省も今年から「**ス**ーパー**グ**ローバル**ハ**イスクール SGH」を指定した。ちなみに、このSGHについては、指定された全国56校のうち、他府県はよく知らないが、関西圏でみると、いわゆる難関大学への進学者の多い学校か、これまで国際教育で成果を上げてきた学校（例えば立命館宇治や神戸市立葺合）が指定されているようだ。

前者のグループの学校のミッションは（その必要性は十分理解して何も反対といっているわけではないのだが）、成績優秀でかつ語学に堪能なので、現地ローカルでの対応にもそつない（課題解決能力のすぐれた）「人材」の育成？、ヤッパリ！と思ってしまう。

後者のような学校というのは、もともと帰国生の受入校としてがんばってきた実績があり、帰国生の特徴の認識や教育実践上の課題克服のノウハウが相当程度蓄積されていると思われるのだが、それとSGHの狙いとがどんな関係にあるのかがよく見えない。「帰国子女の教育を考える会」に関わる一員としては、気になるところだ。

ところで、いきなり私事にわたって恐縮だが、3ヶ月にわたり、ピースボート世界1周の旅に行ってきた。そのスタッフの活動を見ていると「グローバル人材」という言葉など、ことさら唱えるまでもなく、自然に異文化の人と交流していることに感心した。私個人としても、ラテンアメリカとポリネシアにつ

いては全く知らない世界を垣間見たと思う。アンデスの民は国境を越えた共通の文化を持っていること、イースター島—ニュージーランド—ハワイを結ぶ太平洋上の巨大な三角形に囲まれた島々で暮らす海の民は、古来より交流し言語・ダンスなど同根の親戚のようなものであること、などに気付かされた。これらの地域では、自言語、自文化、自風習を守り受け継ぐことに矜持を感じていると思える。これこそが、まさに多様性 **diversity** であり、ローカルを尊重することの大切さというものを思い知らされた。

英語がグローバル言語として世界を席捲しはじめている趨勢はやむをえないとしても、価値観—文化まで英米のものがベストと思いきむのではないか、今喧伝されているグローバル化はややもすればローカルを軽視し、単一の視点だけをおしつけかねないのではないのか、と危惧している。

ローカルなことどもや、多様性の尊重などというのは、言うは易く、結構難しいことだ。

だから、子どもの頃から

- ① 様々な人種・民族・宗教の存在を知り、文化多元論的見方ができるようになる
- ② その一方で、国際基準や普遍的価値（ユニバーサルな基準）はどういうものか考えていける
- ③ 「ローカルな日本人の一員」としてのアイデンティティを持てるような学習・トレーニングを進める必要があると考える。

その際、学校教育の場では、小・中・高あわせて今や毎年 1 万人の帰国生が生み出されているのだから、まずは、外国でいったんはマイノリティとなった経験をもつ帰国生を諸活動に登場させることが重要だろう。

③については、ヘイトスピーチがまかり通り、近隣諸国間同士で余計な国際緊張が意図的につくりだされている現今の政治情勢のもとでは、「ナショナリズム」ウイルスに侵される恐れがあり、その免疫づくりのためにも必要であると考ええる。手法としては、日本人学校で「総合学習の時間」を活用した日本の文化・風習等の学習を、日本国内の学校でもそれこそ地域に密着した形で展開することから始めればいいのだ。

一部のエリート層や資本・金融・労働だけの領域に限定されるグローバル化ではなく、違うものは排除するという日本文化のマイナス面を克服する一つの方策として、いつ外国人との接触があっても対応できる教養はつけておくことがグローバル化の基礎だろう。

そういった意味では、①の一つとして、前述した観光を超えた異国・異邦人・異文化紹介の TV 番組を見て、「ホー！」「へー」と素直に受けとめたり、感心することも、案外いいことなのかもしれない。